

---

# 子守歌、慈雨のように

弦巻絵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

子守歌、慈雨のように

### 【コード】

N93550

### 【作者名】

弦巻松

### 【あらすじ】

病院の前で見た、不思議な光景。近寄りがたい少女の、思わぬ一面。

新緑の季節、天気の良い日曜日。

矢橋啓嗣やはしけいしは総合病院の前に居た。といつても、彼はいたって健康である。

休日に何の予定もなく、暇を持て余した矢橋は、当てもなく散歩をしていた。

そこで産婦人科へ行くところだった身重の従姉と出くわした。彼女の強引な誘いにより、なぜか病院まで付き合わされることになったのだ。

しかし、いくら親族とはいえ旦那でもない男が診察室の中に入ることには躊躇われ、彼は病院の外で従姉が出てくるのを待っていた。

この近辺では最大規模を誇る総合病院は、各種設備が整っており、敷地も広い。矢橋が今いる庭も、バリアフリーが徹底されており、植えられた様々な植物にまで手入れが行き届いていることが分かる。

矢橋はその中で、ひときわ青々と繁った大きな樹木に目を留めた。その根元に、小さな人影。

日曜にもかかわらず、見慣れたセーラー服姿のその少女は、矢橋の高校の後輩・上代月子かみしろつきである。

草の上に座り込んだ彼女は、まるで赤子を抱いているような格好をしていた。ゆっくりと体を揺らし、何事かを囁いている。

だが、矢橋の目は、彼女の腕の中のもの映さない。さながらエ

アー抱っこである。

上代は彼の存在に気が付いていないようだった。矢橋はちょうど近くにあったベンチに座り、彼女の様子をそつと観察した。

小さな子守歌が聞こえる。彼女が歌っているのだ。澄んだ優しいその声は、矢橋を心地良い眠りへと誘った。

上代が、光の玉を抱いている。光の玉をそつと揺らし、あやしている。

人形のように整った純和風のその容貌に、普段は何の感情も見せない彼女。

だが今、その瞳はどこまでも優しい慈愛に満ちている。聖母だ、と矢橋は思った。

やがて光の玉は、彼女の腕の中から離れ、ふわふわと浮きあがっていく。上代の顔の高さまでやってくると、そつと彼女の頬に触れた。

そして光の玉は高く高く舞い上がり、ひときわ強い光を放つ。その瞬間、世界が真っ白に染まった

「 啓嗣君！ 起きて」

肩を揺すられ、矢橋は重い瞼を上げた。目の前に、矢橋の顔を覗き込む従姉の姿があった。

周囲を見回してみたが、上代の姿はもうどこにも無かった。

「吃驚したわよ、こんな所で寝こけてるなんて」

「ごめん。……で、どうだった？」

「順調だって。触ってみる？」

矢橋は従姉の腹に手を触れ、囁いた。

「ちゃんと元気に生まれてこいよ」

もしかしたらこの子も、あんなふうに彼女に抱かれていた魂の一人だったかもしれない。

そして俺自身も、かつては同じように誰かの腕の中に居た魂かもしれないと、矢橋は感じたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9355o/>

---

子守歌、慈雨のように

2010年11月15日19時13分発行